

## 生徒主体の学びを構築するための研究推進

### Promotion of training to build student-centered learning.

山下 卓\*      渡部 康弘\*      小林 和久\*

Suguru Yamashita      Yasuhiro Watanabe      Kazuhisa Kobayashi

#### 概要

これからの時代において、求められる学力観が大きく変わろうとしている。未来を生きる生徒のための「学校」「授業」について我々教職員が真剣に考え、自らが学び続ける見本となることが重要である。本校では授業研修・教員研修を計画的に実施し、教職員自らが学び合い、共に成長できる「研修」を目指している。今年度の研修内容とその成果、今後に向けての展望を報告する。

#### 1. はじめに

北海道科学大学高等学校では、2019年度より「生徒主体の学び合い」をめざし、「学びの共同体」の取り組みを基盤とした校内研修会及び授業改善を本格的にスタートした。この動きは新高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえてのものであり、主体的・対話的で深い学びの実現、本校でも年次進行で進んでいるICTの効果的な活用、大学入試改革と密接に関係している取り組みである。

本稿では、北海道科学大学高等学校が2019年度に取り組んだ二本柱の研修（教員研修・授業研修）の内容とその成果について報告し、今後に向けての課題と次年度への展望について考察したい。

から学ぶ研修（外部研修会への参加・他校視察）の3つの研修形態を軸に研究研修部を立ち上げ始動した。③については研究研修部のメンバーを中心に人選した。参加者は報告書を作成し、教員全体にデータ等を配信し、可能な限り報告会を行い研修成果の共有を図った。教員それぞれに日常の進学指導、部活動指導など多くの業務があり、予定通りの派遣とはならなかったが、外部研修後の参加教員の変化、他の教員への働きかけなどから、外を見ることの有用性は明らかである。本稿では①②についての報告をメインとし、以下に示した今年度の主な外部研修会・他校視察の実績については紹介のみとする。

表1 今年度の外部研修会への参加・他校視察一覧

北海道学びのネットワーク参加	【札幌】	2019/5/10
千代田区立麴町中学校視察	【東京】	2019/5/17
学びの共同体公開授業研修会参加	【長崎】	2019/6/21
北海道学びのネットワーク参加	【札幌】	2019/8/17
群馬県立中央中等教育学校視察	【群馬】	2019/9/17
北海道学びのネットワーク参加	【札幌】	2019/10/4
新ひだか町立静内第三中学校視察	【静内】	2019/10/7
広島大学附属中学校・高等学校視察	【広島】	2019/11/29
新ひだか町立静内第三中学校視察	【静内】	2019/12/5
高大連携教育フォーラム参加	【京都】	2019/12/7
北海道学びのネットワーク参加	【札幌】	2019/12/7
札幌開成中等教育学校視察	【札幌】	2019/12/11
学びの共同体研究大会参加	【静岡】	2020/1/11

※予備校主催等の研修会・勉強会等は除く

#### 2. 研修計画の策定について

2020年、大学入試と学習指導要領の大改革が実施される。教育現場では学力の3要素、その中でも特に「主体性をもち、多様な人々と協働して学ぶ態度」の養成が急激に変化する社会変化に伴い、教育現場に喫緊の課題として突きつけられている。

本校では2018年度より生徒主体の授業、全ての生徒が学びに向かう授業をめざし、「学びの共同体」の取り組みについてブックレット等を用いて紹介した。2019年度からは①教員集団としての目線合わせ＝教員研修 ②互いに見合う授業研修 ③他校・他者  
\*北海道科学大学高等学校

### 3. 本校における研修計画について

#### 3-1. 教員研修について

先ほど述べたように、教育現場は今までにない変化と対応を求められている。その時の教育現場に必要なことは我々教職員集団が既成概念にとらわれることなく、学び続け、常に必要な情報や知識を更新していくことである。今年度は全5回の教員研修(内1回は大学のFDSD研修会)を企画し、全教員で、各テーマについての共通理解と確認を目指した。

今年度は回数については当初は全6回を企画していたが、予定講師(発達障害とその対応)の日程調整が難航し、5月の実施を中止とした。できれば5月までの早い時期に専門家から多様な生徒の対応について学び、生徒対応に活かすことが重要であるが、医療現場においても対応できる専門家が不足しており、次年度から組織される教育相談担当部署で勉強会等に参加し、自前で本校教職員に向けて講習を行うことができる体制をつくりたい。

昨年度はアンガーマネジメント講習も実施したように、我々教職員が自分自身を知り、正しい知識と経験の両方で生徒・保護者対応できることが理想である。また、働き方改革が様々な場面で話題になり、メンタルヘルス研修等を通じ、我々自身が自分自身をコントロールし、良いメンタルの状態の仕事に臨むことは何よりも重要である。

新テストに向けての勉強会や研修は進路支援部や3学年担当者、教科責任者を中心に複数回参加している教員が以前にも増して増加している。道内大学も私立国公立問わず、入試方式や大学の改革スピードが加速しており、最新事情に精通することはどの教員にも重要な事である。また、全員が教員研修の機会を通して、新テストや大学入試、大学改革に関して共通の知識や情報を共有することは重要である。

QU研修会はクラスの人間関係づくり、生徒個人の把握に最適な調査ということで今年度から実施したものである。教員の感覚的なものを否定するのではなく、経験に加え調査・データによる根拠があれば、より生徒対応の選択肢は広がることになる。今年度はQU調査を1・2年生は2回、3年生は1回実

施することができ、生徒対応に活かすことができたと考えている。今年度の調査結果の分析・振り返りと次年度の実施に向けて、11月にQU研修を実施できたことは今後の更なる活用に向けても意義のある研修となったと考えている。

また、教員研修の位置づけとは異なるが、12月6日にメンタルコーチの飯山昶朗氏を招き、メンタル講演会とワークショップを実施した。PTAにも広く声かけを行い、生徒・教員・保護者が本番で成功するためのメンタルの重要性について学ぶこともできた。ワークショップは部活動顧問、部活動生徒を中心に100人を超える参加者があった。教育の専門家として、様々な領域の専門家から学ぶ機会を今後も企画していきたい。

表2 2019年度の教員研修の日程

教員コンプライアンスについて 発達障害等への対応について 【管理職】	2019/4/8
新テストに向けて 道内大学の状況分析 【駿台予備校職員】	2019/6/6
教員のメンタルヘルス 【本校カウンセラー】	2019/9/4
QU研修会 【北翔大学学長 山谷敬三郎氏】	2019/11/28
※FDSD研修会 【法人で企画】	2019/8/8

※【 】は講演・説明者



図1 教員研修(11/28)の様子

#### 3-2. 授業研修について

今年度は回数については全8回を企画・実施した。全8回の授業研修の内容については①全体研修 ②学年研修 ③教科研修 の3つに分け、それぞれの

目的を明確にして4月当初に日程、授業者の選定の案内を行った。

全体研修は4月・8月・12月に設定した。4月については今年度の研修計画全体についての共通理解を短時間で行い、その後教科に分かれて、今年度の研修についての取り組み等を検討した。8月については広く全道の中学校、高校に案内し、公開研修会とした。本校としては初の試みであるが、授業公開、中心授業（本校中谷教諭）、佐藤学氏の講演会を実施することができた。石狩管内中学校の始業式ともバッティングし、全体の参加者は伸び悩んだが、広く外に向けて公開し、我々自身が「見られる」経験ができたことは非常に大きな一歩である。12月については「授業における教師の見える方と学び観」と題し、姫野完治氏に講演をお願いした。これまでの自らが受けてきた教育、これまでに担当してきた生徒、本校以外の教員経験など本校教員といってもバックボーンは多種多様である。教育は何か唯一の絶対的な指導方法が存在するわけではなく、トップダウンの指示を押しつけて教育を行うのではなく、それぞれの教員が自分の良さを生かしながら、目の前の生徒に対し真剣に関わることで、お互いの見え方の違いを良い意味で受け入れて、教員が本気の集団となって生徒に関わることの大切さを学ぶことができ、それぞれの教員がこれまでを振り返る良き研修となった。

学年研修は5月と11月に設定したが、生徒個々の学びが話題になることが多い研修である。自分の教科での生徒の見える方、他教科での生徒の見える方、この点を意見交換することで、生徒個々に対して様々な気づき、発見、解決のヒントを見出すことが可能である。研修を経験した教員や他校での実践を視察した教員が先導役、聞き役となり、「生徒個々の学び」を話題にした非常に有意義な研修となった。また、この研修の時間だけにとどまらず、職員室の会話の中でも生徒個々に対する話題が他教科の教員どうしを結びつける共通の話題となり、12月に実施した授業参観強化週間の報告シートでも生徒個々の学び、それをサポートする教員の工夫（教材提示、ICTの活用など）に注目したコメントが前回実施したよ

りもかなり増加していることが印象的であった。

教科研修は7月と2月に実施したが、教科の特性を生かしながら、教科の横のつながりを密にし、互いの工夫を教科の財産として共有する貴重な機会である。例えば年配で数多くの進学校を経験した教員で受験指導のノウハウに長けている教員、若手でICT等を使いこなす、新しい指導法にチャレンジしている教員をつなぐことができるのが教科研修である。互いの教員の良さを生かし、教科全体としてレベルアップしていくことが重要であり、教科研修がきっかけになり、日常的な情報共有や協力が進んでいくことが理想である。例えば今年度理科では実験の題材を互いに持ち寄り、どのクラスも共通で内容の濃い、ICTも活用した先進的な実験を行うことができた。また、どのクラスに対しても共通のプリントや動画を活用し、教員同士互いの得意分野を活かす授業改善につながる協力が行われている。

表3 2019年度の授業研修の日程

全体研修（2019年度の研究推進計画の検討）	2019/4/17
学年研修（公開授業・草川剛人氏による講演）	2019/5/16
教科研修（公開授業・協議）	2019/7/11
全体研修（全道の中学校・高校に案内） 公開授業・中心授業（授業研究） 講演会（佐藤学氏）	2019/8/26
学年研修（公開授業・協議）	2019/11/6
全体研修 講演「授業における教師の見える方と学び観」（姫野完治氏）	2019/12/12
教科研修（研修報告・教科ごとの振り返り）	2020/2/19
全体研修（今年度のまとめ・次年度の方向性） ※配信による	2020/3/19

#### 4. 本校の研修推進についての課題

今年度の1年間を振り返っての課題としては①年間計画における適切な研修時期の設定 ②ICTへの対応 ③非常勤教諭（教諭全体の3割以上に相当）を巻き込んだ研修の重要性 の大きく3点にまとめられる。①については教員個人、学年ごとに負担感が増す時期が異なり、全体を満足させる設定がなかなか困難である。動画配信等を活用し、30分以内の短い研修会を複数回行っているという他校の工夫等

も参考にしながら、教員が本気で課題に向き合える研修を企画していきたい。②については③とも重複するがICTを活用したいがスキルがない教員へのサポートと研修会の設定である。次年度以降は1・2学年がiPad所有となり、今まで以上に活用していくことが求められる。③については勤務時間や手当の問題等があるが、教科会議等を計画的に設定し、長期休暇や午前授業期間等を活用した研修会を設定していく必要があると考える。また、授業改善に向かう教員の意識は日増しに高まっており、外部研修や他校視察の日程案内を誰しもが閲覧し、選ぶことができるシステムを構築し、学ぶ意欲の高い教員の取り組みをサポートしていきたいと考える。



図2 全体研修（8/26）で実施した中心授業の様子

## 5. まとめ

冒頭でも述べたように、教育の現場では学校改革、アクティブラーニングの導入、ICTの活用、大学入試改革とかつてない変化を迫られている。そのような時代においては教員個人が学び続け、自分軸を持ちながら成長しなければならないが、学校として生き残りをかけて勝負していくときに、教員集団のレベルを上げて、集団としての力をつけていくことは不可欠である。本校は現在、多様なキャリアの教員が日々、授業改善、生徒対応に尽力されている。学校としてのビジョンをしっかり持ち、教員集団のベクトルを合わせ、教員個々のスキルを有機的に結び付け、それぞれの教員の努力の成果を学校全体に還元していく必要がある。今後も様々なアンテナを

張り巡らせ、情報収集を行い、教員集団が本気で教育に向かうきっかけとなる研修を計画し、日々生徒の未来のために奮闘している教員のニーズに合った研修を企画していきたい。

## 参考文献

- (1) 文部科学省：高等学校学習指導要領，2018年3月
- (2) 池上彰，佐藤優：教育激変，2019年4月
- (3) 石川一郎，矢萩邦彦：先生，この「問題」答えられますか，2019年12月